

# 友よ 第五回

赤神 諒



## 第五章 波川に咲く花

——天正八年（一五八〇年）八月、土佐国・仁淀川



主の信親のぶちかが断言したように、仁淀川によどがわは限りなく青かった。

それは、空が澄んでいるせいか、山が清らかなせいか、それとも谷彦十郎の心が珍しく浮き立っているせいか。

書見に少々飽きた彦十郎は、書物を手に半裸で岩場に座り、川底をのんびり散歩する蟹の姿を眼で追っていた。

## 友よ 第5回

彦十郎と資吉すけよしに仁淀川を見せてやりたいと信親が言い出したため、弥次郎を案内役に主従で波川はかわの地を訪れていた。長宗我部の御曹司はまた背が伸び、堂々たる体軀は六尺一寸（約一・八五メートル）にもなっていた。

「若なんぞ軽い、軽い」

「待たんか、資吉！ 卑怯だぞ」

山のごとき巨漢が太い両腕で、信親の逞たくましい長身を丸太のように高く掲げた。体は傷痕だらけだが、すっかり治っている。羽床はゆか資吉は信親の全身を容赦なく川面へ叩き入れた。

派手に水しぶきが上がる。

「どうじゃ、若！」

資吉は得意気に相撲取りのような腹を突き出している。羽床勢も傘下に加わった後、元親は向かうところ敵なしで阿讃あさん攻略戦を着々と進めた。が、伊予郡代として西征の途にあった久武親信ひさたけちかのぶが不慮の戦死を遂げたとの報を受け、盛夏に一旦帰国したのである。

まだ夏の強さを失わぬ日差しが、禪ぜん一丁の若者たちの裸身を秋の気配から守っていた。最初は泳ぎを楽しんでいた信親が「川の中で相撲を取ろう」と言い出したのは、半刻近く前である。

土佐の外は、長宗我部のもたらす戦雲が吹き荒れていても、国内は至って平穏で、女の夜歩きも平気なくらいだ。

川に沈められていた信親が、咳き込みながら顔を出した。

## 友よ 第5回

「お主の怪力には、ほとほと参った。資吉よ、また来年この場で勝負しようぞ。俺はその時までには体をさらに鍛えておく」

ますます得意になった資吉が、盛り上がった力こぶを撫でている。川の中では足の動きが鈍くなるぶん、上半身の腕力が大きくものと言った。信親が何度立ち向かって、資吉には勝てぬ。弥次郎も先だって水中へ叩き込まれたが、今宵の宴の支度があるからと、波川家の居館へ戻っていた。

「資吉、親しき仲にも礼儀ありじゃぞ。多少は手加減せんか」

彦十郎が大岩の上で苦言しても、資吉に反省の色はまるでない。降伏後は陣中でも信親とずっと一緒におり、出丸でも同居するうち、無邪気な資吉の人柄もあって、たちまち信親衆に溶け込み、まるで十年前から岡豊おこうにいたように大きな顔をしていた。

今回、信親が資吉を仁淀川へ連れ出した別の意図を彦十郎も解していた。羽床家と同じく、波川家も長宗我部に降くだった外様とさまだが、清宗・弥次郎父子が、今では家中に馴染み、大切にされている姿を示して、資吉を安心させたかったわけだ。したたかな権謀というより、素直な心配りに違いない。

「禁じ手なぞ、申し合わせておらんはずでござる」

遊びであっても勝ち負けにこだわるのは、資吉の根っからの性分らしい。

「俺はもういい。そろそろ彦十郎の番だ」

## 友よ 第5回

信親が水を向けると、資吉は大げさに身構え、猪のような唸り声を上げた。

「相撲なんぞ取って、何か世の役に立つのでござるか」

「楽しいぞ。それだけで、よいではないか」

「私は別に、楽しいとも思いませんが」

「裸でぶつかり合えば、もっと親しゅうなれる。互いを知れる。体も鍛えられる」

「仕方ござらんな」

彦十郎はこの日から読み直し始めた『天元神変神妙経』を傍らに置くと、岩場から降りて川に入った。さりげなく岩陰に手を伸ばし、ひそかに蟹を摘まむ。

「半腰になって向き合う。」

資吉の巨体は、彦十郎の倍ほどもありそうだった。「片手でお相手いたそうか」と資吉が勝ち誇るように笑った時、彦十郎は手中の蟹を投げつけた。

突然、顔面に張り付いた異物に、資吉は慌てふためく。

彦十郎はすかさず、斜めから突進した。

肩から、思い切り資吉の腰へ飛び込む。

資吉が仰向けに倒れると、太い壁のような水しぶきが上がった。

「なるほど、上手い勝ち方だ」

岩場で観戦していた信親が愉快そうに笑った。

## 友よ 第5回

「卑怯だぞ、彦十郎殿！ あいてて——」  
起き上がった資吉が鼻から蟹を引き離そうとするが、まだ螯はさみで肉を挟まれている。

「そういえば、禁じ手は決めておらなんだな」

「相撲で蟹を使うなど、禁じ手に決まっってござる」

「いつ誰が決めたのだ？ 川相撲に決まりなどあるまい」

信親が笑い出すと、彦十郎は岩場に戻り、書物を再び手に取った。水が撥ねて濡れている。やはり川は学問向き場ではない。

「口で彦十郎に勝つのは相当難しいぞ、資吉」

三人並んで、大きな岩に腰掛ける。

晩夏の雲が、ゆるりと空を流れてゆく。

「なあ、資吉。新目弾正はいかなる人物であった？」

「若に少し、似ておるやも知れませんな」

新目は小領主の嫡男で、身分を問わず誰とでも交わり、仲良くなつたらしい。幼時から武芸に秀で、餓鬼大将のまま長じたが、西讃と中讃を荒らす山賊に近隣の村々が困っていると聞くと、子分を連れて討伐に出向いた。新目の武勇の前に山賊は降伏したが、貧しさゆえ賊に身を落としたと知り、新目の小領へ連れ帰って共に暮らし、力仕事をさせた。金が足りぬから義賊をやろうと言い出し、瀬戸内を荒らす海賊を襲いもした。白銀しろがねの甲冑はその時の戦利品だった。

父の死後、渋々ながら小領主になった新目は、皆で仲良く暮らそう

## 友よ 第5回

と言い出し、年貢を作高の一分だけにした。人物眼があって適材適所で仕事をさせ、面倒見もよかったから、行き場のない者たちが評判を聞きつけて遠くから頼ってきた。本人は領主などやめて気楽に暮らしたいと常々漏らしていたという。

「新目弾正と一度、酒を酌み交わしたかった」

信親がしんみりとこぼした時、朗声が川辺から聞こえてきた。

——若さま、皆さま。少し早いですが、宴の支度が整いましたよ。

露草色の小袖は波川家のお福だ。

谷家との縁組が決まってから、両家を行き来する中で彦十郎も何度か会ったが、「良い嫁をもらえて幸せ者だ」と事あるごとに周りから羨ましがられた。確かにお福のおかげで、ひねくれ者の彦十郎でももう一度幸せを感じられそうな気がしていた。

「ありがたや。ちょうど腹も減ってきた。皆、帰るぞ」

信親がまだ濡れた体に爽やかな水色の小袖を引っかける。資吉も続き、びしょぬれの体で小袖が濡れたが、頓着する様子もない。

仁淀川の川面を煌めかせる日差しは、夏の激しさを失いかけていた。



二

「若葉の時分には、鮎の大群が遡さかのぼって参りましてな」

日はとっぷりと暮れて、波川城から見下ろす仁淀川は、見る者に月の輝きを届けているが、波川清宗には気付く様子もなく、自慢話も当

## 友よ 第5回

分終わりそうになかった。

目がくりりとして唇が太く、少しばかり間が抜けて人の好きそうな清宗の顔は、鰻にも似ていたため、清宗自身の鰻好きとあいまって、清宗は「うなぎ殿」とあだ名されたが、本人も存外気に入っている様子だった。

「うなぎ殿、このアマゴは実に美味うござるぞ。やはり魚は下手な真似をせず、焼くに限り申す」

信親の右隣では、資吉が塩焼きを頭からボリボリと貪っていた。左隣では彦十郎が黙々と酒杯を重ねている。三人と向かい合って、うなぎ殿の左右にお福と弥次郎姉弟があり、何かと気を配っていた。

気心の知れた者たちと、新鮮な川の幸に舌鼓を打ちながら酒を飲み進めていると、もう天下に太平が到来したのかと、信親は錯覚さえ覚えるのだ。

「今日は手に入らなんだが、本当は鰻が一番じゃ。ウグイもオイカワも美味しいが、羽床殿。川は魚だけではないのじゃ。仁淀川の青に勝る青は、この世にあるまいて」

波川城は、仁淀川が流れを集めた中流の南岸に建つ。

小高い山の頂に築かれた城は小ぶりだが、土佐本国の中心部に堅牢な城砦など無用だ。ふだんは麓の居館を使うが、今宵は信親一行を歓迎すべく、眺めのいい主郭の奥座敷に宴席が設けられていた。

「川が青いと、魚も美味しいのでござるか？」

## 友よ 第5回

資吉はまた串を取り、大きな口へ一尾を頭から入れた。

「なるほど、面白い考えじゃ。されど、羽床殿。仁淀川は魚だけではない。四国のどの川よりも水が澄んでおるゆえ、川舟がまるで宙に浮いておるように見えるのじゃ」

数ある四国の川を調べ尽くしてはまいが、清宗は寸毫の躊躇いもなく決めつけていた。

「うなぎ殿。仁淀の青は畢竟、他とどこが違うのでござろう？」

「さすがは若殿。よう訊いてくだされた」

盃を手取るのも忘れて、清宗が身を乗り出してくる。資吉は魚が美味いとしか言わぬから、張り合いがない様子だった。

「感じ方は様々あれど、美しく濁った青じゃとわしは思いまするな」

「透き通ってはおらぬ、と？」

「何と申し上げればよろしいか。ほれ、五月晴れの空の向こうは見えねども、綺麗に澄んでおるのと同じでござる」

うなぎ殿の必死な仁淀自慢は微笑ましく、酒の肴にはちようどいい。信親にとっても、故郷土佐の自慢だ。

「是非あの美しさをお見せしたいもの。もしかすると三途の川とは、あのような川なのやも知れませぬ」

「父上、縁起でもないことを」

お福が優しくたしなめると、清宗はしまったという顔をして、禿げ頭をポンと叩いた。



## 友よ 第5回

「若殿、わしはただ、この世のものとは思えぬ美しさじゃと……」

「俺は今日、資吉のせいで仁淀川の水をたっぷり飲まされた。明日は川相撲なぞやめて、濁った青の美しさを楽しませてもらおう」

仁淀川をこよなく愛する清宗は、暇さえあれば川の色の違いを調べてきたと胸を張った。結構、暇なのかも知れない。

「谷殿も是非お楽しみくだされ」

ふだん不愛想な彦十郎も、舅しゅうとになる好人物に軽く会釈で返した。

戦下手の清宗は、重要な役回りを与えられながら、伊予攻めで大失態をしでかし、逃げ帰ってきた過去があった。元親からひどく叱責され、切腹ものだきりふしと囁かれたが、相手が毛利の名将小早川隆景こばやかわたかかげであったために、忠兵衛の口添えで敗走もやむなしとされ、赦ゆるされた経緯がある。清宗は谷家との縁組をありがたやと素直に喜んでいた。

「上流にあるとっておきの場所を、若殿にお教えいたしますぞ。過日、御所様ごしよさまをお連れしたところ、いたく喜んでおわしましたな」

長宗我部が主筋の一条家を滅ぼした後、清宗は温厚篤実な人柄を買われ、元親が傀儡かいらいとして擁立した一条家の嫡流内政ただまさの世話役を仰せつかり、甲斐甲斐しく面倒を見ていた。政変で放逐された父に代わり、土佐国司として祀り上げられた内政は「御所様」と呼ばれ、丁重に扱われはしたが、気の毒な境涯にあった。

「わしは明日も御所様に呼ばれておるでな。弥次郎がお連れせよ」

信親の姉を娶めとった内政は義兄でもあり、もうすぐ二十歳になるが、

## 友よ 第5回

岡豊城から南へ一里も行かぬ大津御所で飼い殺しにされていた。実姉の嫁ぎ先だから、信親も何度か訪れたが、内政はあと三日ほどで衰弱死しそうなほど痩せ細っており、顔面も蒼白だった。

「されど父上。アマゴ漁師の話では、明日は雨だとか。仁淀川といえども、天氣の優れぬ日は、川の色も冴えますまい」

いや、曇ろうと雨が降ろうと、仁淀川は日本一だと清宗が褒めちぎり出すと、弥次郎は諦めたように苦笑した。

「あの透き通った灰色の美しさは、若いお前にはわからんか」

信親も曇天どんてんの日の川の色を、それほど好きではない。

「灰色なのに、透けて見えるのでございますか」

清宗は残念そうに何度もかぶりを振った後、気を取り直したように居住まいを正して、信親を見た。

「若殿。愚息に改めてしかと伝授しておきますゆえ、お気が向かれた時はいつでもご案内申し上げますぞ。のう、弥次郎」

うなぎ殿の顔に苦勞皺なまじりが目立つのは、降将として常に警戒されながら家中を生きてきた名残なごりかも知れないと、信親はふと思った。

「季節により、時間により、場所により、その時見る者の心により、川の色は千變万化せんべんばんかいたします。仁淀もさることながら、われらが四し万十まんじゅうは——」

「まだ川の話が続けるのでござるか、波川殿」

ずっと黙っていた彦十郎が低音で口を挟んできた。川談義の最中

## 友よ 第5回

は黙然と酒を啜<sup>すす</sup>っていたが、さすがに閉口した様子だ。

「今宵は珍しく谷殿もお付き合いくださっているのですから、戦の話でもいたしましょう」

弥次郎は讃岐攻めの最中、義兄となる彦十郎に軍学を伝授してほしいと、しつこく頼み込んだ。最初は邪険にしていた彦十郎も、根負けして手ほどきを始めたところ、なかなか飲み込みが早い。弥次郎を育て上げれば、自分が神官に戻れるからと、彦十郎も真剣に教えるようになった。

「馬鹿馬鹿しい。宴の席でさように無粋な話なぞ」

弟子を叱りつけるように彦十郎がたしなめると、弥次郎が頭を掻いた。

「父の苦手な話でなくば、川自慢が続きますゆえ」

彦十郎の隣で舟を漕ぐ巨漢を見ながら、信親が話題を変えた。

「讃岐の人間に飲ませる時は、気配りが必要だな」

資吉は川相撲の熱闘について唾を飛ばしながら語った後、ぼりぼりアマゴを食べ続けていたが、いつの間にか完全に沈黙していた。

「お福、羽床殿の寢床はできておったか？」

慌ててお福が家人に指図すると、信親は憚りに立ち、冷たい月影に照らされた仁淀川へ目をやった。

うなぎ殿のひたむきな話を傾聴<sup>けいちやう</sup>していたぶん、酒を飲み過ぎたか。

ふわりと浮かぶような酔い心地で、廊下を歩いてゆく。

## 友よ 第5回

渡り廊下の先に佇たたずむ小さな影を見たとき、酔よいは一瞬で醒さめた。肩まで届かぬ短髪の若い女が、細雲の通り過ぎた明月を見上げている。輝く肌は滝で泡立つ清流の青白さだった。首もとに、瑠璃るりの首飾りが見え隠れしている。心臓がドクンと音を立てた。

「るい……ではないか」

信親を見るなり逃げ出した姿を追いかけて、細い手首を捕まえた。

「お離はなしてくださいませ」

「るい、俺のせいで、困こっておるのではないか？」

優しく尋ねると、るいが怖いものでも見るように振り向いた。

相変わらず醒めた無表情だが、心なしか痩せた気もした。

「すまぬ。俺が懸想けそうなどせねば、そなたは岡豊城で猫とのんびり暮らせたはずだ。なぜここにいる？ あれから何をしていた？」

笑顔はない。るいの顔には当惑しか、なかった。

「若様とはもうお会いしてはならぬと言われております。お赦ゆるしてくださいませ」

手首を振りほどいて、るいは踵かかとを返した。

そのまま一度も振り向かず、小さな姿は廊下の向こうへ消えた。

信親はるいのいた場所に立ってみた。ほんのりと足の裏にぬくもりを感じる。

るいはあの首飾りを身に付けてくれていた。ただそれだけで、信親は救われた気がした。

## 友よ 第5回



「して、何か分かったか、弥次郎？」

翌朝、宴の余韻もすっかり消えた主郭しゆかくの奥座敷で、信親は弥次郎と向かい合った。彦十郎は神官らしく波川城近くの神社へ参詣に出向いており、隣室からは、わずかの酒でひとり完全に酔い潰れた資吉の躰こゝろが聞こえてくる。

信親が身を乗り出すと、弥次郎は声を落として語り始めた。

「それがしも驚きましたが、るい殿はこの夏前から、母の侍女をして  
いるそうです」

信親たちが羽床城の攻略を終え、さらに東へ進撃して重清城しげきよじょう、岩倉城を攻略していた頃だ。

長宗我部家としても、御曹司の想い女を邪険には扱えない。一門衆の正室の侍女として預からせ、岡豊から遠ざけたわけだ。かねて波川家は孤児たちを受け入れていたから、素性の知れぬ女の扱いも慣れたものだろう。忠兵衛あたりが考えた処置か。

「るいは波川家で、うまくやっているのか？」

「ほとんど誰とも口を利かれぬようですが、言い付けられた仕事はちゃんとこなしておられるとか」

弥次郎が耳元でそっと囁いた。

「若様。もしもるい殿にお会いになりたいなら、密かに場をお作りいたしまするが……」

## 友よ 第5回

弥次郎のいる波川なら、るいと会う口実は幾らでも作れる。何度も会って、仁淀川の辺で話をすれば、るいはきつと心を開いてくれる気がした。だが結局は、るいと自分を苦しめるだけか……。

「波川にも、猫は住んでいるか？」

思わぬ問い返しだったらしく、弥次郎は訝しげな顔をしたが、こくりと頷いた。

「はい。普通に暮らしておりますが」

「ならば、よい」と頷いてから、信親は立ち上がった。

波川は仁淀川の水辺に小さく開けた綺麗な地で、戦とも全く無縁だ。猫も住んでいるのなら、るいがまた笑える日が来るかも知れぬ。

「俺がるいと会った件は、伏せておいてくれぬか。またどこかへやられたのでは、不憫ふびんだからな」

「畏かしこまってございまする」

麓の居館に住むるいが城にいたのは、宴の裏方の仕事だろうが、食事も終わり、片付けもあらかた済んでいた。るいは信親に会いたかったのではないか。だから首飾りも付けていたのだ。それならなぜ、るいは逃げたのか……。

信親は弥次郎と並んで、仁淀川を見下ろした。

曇り空の下を流れる川は濁った灰色をしていて、うなぎ殿の言うように透き通っては見えなかった。山麓さんろくから吹き上がってくる川風に、信親は秋の到来を感じた。

## 友よ 第5回



四

早くも傾き出した冬日が、岡豊山をほの温かく包んでいる。

気合一閃、信親の片鎌槍が冷気を切り裂いた。

朝餉あさげと夕餉ゆふげの前は、独りじっくり時間を掛けて武技を練る。

槍の穂先の片側に鎌が付いただけで、槍の扱いは大きく変わった。使いこなせぬ者に片鎌など邪魔なだけだが、持つ者が技に磨きを掛ければ、驚きの威力を発揮する。信親はこの間、片鎌槍を体の一部とすべく血の滲む努力を重ねてきた。

同居の資吉はもちろん、福留隊の黒具足その他、腕に自信のある者を出丸へ呼んでは、立合いを繰り返し、腕も磨いてきた。心身も充実している。新目弾正に少しは近づいたはずだ。

戦場に身を置いたつもりで、四方八方から襲いかかる敵を頭に描いては、倒してゆく。

さらに四半刻しはんときほど休みなく全力で動いてから、信親は縁側へ倒れ込んだ。

冬の弱光が、信親の鍛え上げた裸身を柔らかく照らしている。

眩しさに瞼まぶたを閉じると、浮かぶ姿は決まってるいだった。

腕を一寸も上げられぬほど疲れた時は、心の縛りも溶けてしまうらしい。そんな時は抗わず、るいのことを様々思うようにしていた。

「御免」

怒鳴るような太い声の後、バタバタと荒々しい足音が近づいてき



## 友よ 第5回

た。資吉だ。彦十郎なら足の裏で廊下の板を擦るような足音だが、昨日から土佐神社に戻っている。最近では学問好きの弥次郎が神道にも関心を持ち、面白い質問をしてくるそうで、何やら調べ物があるらしかった。

ゆっくり半身を起こすと、資吉が「ただいま戻りましてござる」と巨体を折り畳んでいた。

「十日ぶりくらいだな。息災にしておったか」

「正月に餅を食い過ぎて太ったぶんは、体を引き締めましたぞ」

年賀挨拶のため家臣団が各地から岡豊城に集まってくると、酒好きの土佐人は連日のように酒を飲み、派手な宴を楽しむが、信親の出丸も会場の一つとなった。ふだんは三蔵が万事手配するが、何しろ人数が多いうえに連日連夜だ。信親は挨拶に訪れる家臣たちへの応対に忙殺されるし、弥次郎が手伝っても埒が明かないため、嫌がる彦十郎にまで頼み込んで、何とか差配した。

酒は実喰屋（しぐい、や）から酒樽を買って資吉に運び上げさせたが、餅は搗（つき）きたてが一番うまい。諸事万端手配した弥次郎の絶妙の合いの手で、隼人と資吉が餅を搗き、大量に作った。二人とも見かけと違って、酒に弱い。ひたすら餅ばかり食べて、太ったわけである。

「ご覧ください。また、傷が増えましたぞ」

袖をまくって差し出された逞しい前腕を見ると、紫色の派手な打ち身があった。乱世には決まって体の傷を自慢する将がいるが、資吉



## 友よ 第5回

もその一人だった。

「まさか弥次郎が付けたのか？」

「相当腕を上げましたな。若に手合わせ願いたいと、生意気を言うておりましたぞ」

人は変わるもので、弥次郎は羽床城の一騎討ち以来、さらに背も伸びて逞しくなり、ますます武芸に打ち込んでいた。ふだんは岡豊城の家老屋敷で鍛錬をしており、信親も念入りに稽古を付けてやるから、めきめきと上達していた。どこか恥ずかしげな笑顔こそ変わらぬが、「それがしが若様をお守りいたします」とまで言っただけのける一人前の長宗我部侍になりつつあった。

正月を挟んでこのふた月ほどは、壊れかけていた波川城の土墨がついに崩れたとかで、清宗に頼まれて修復のために波川へ戻っていたのだが、鍛錬は怠れぬからと、すっかり親しくなった資吉に、波川に逗留するよう頼み込んだ。カ仕事でも頼りになるから、一石二鳥なわけだ。資吉は人質だが、信親が忠兵衛に認めさせていた。

「弥次郎は次の戦で使えそうか？」

早春には満を持して出陣すると、元親は公言していた。伊予は後回しにして、讃岐と阿波を完全に攻略する。

「さて。鍛錬と戦は別物。いざとなれば、わかりませぬな」

もともと弥次郎が武芸に身を入れなかったのは、人を殺めたくないからだ。乱世では笑止の言い草よと馬鹿にする者も多いが、信親は

## 友よ 第5回

そう思わなかった。心優しき弥次郎が本当に人を殺せるのか。

「して、土塁の修理のほうは終わったのか」

「あと数日は掛かるかと。あの城は長年、放ったらかしでしたからな」

「土佐のど真ん中へ攻め込む者などおらぬが、一門衆の城ゆえ、見てくれもあるう。ご苦労な話だ」

信親は寒さを感じて、着物に袖を通した。

「そういえば、弥次郎が若殿に差し上げたい物があると、熱心に何か作ってありましたな」

「ほう。俺に何をくれるのだ？」

「驚かせたいそうで、固く口止めされてござる。相当の美味をたくさん食わせていたただかねば、明かせませぬな」

「また太るぞ。ときに、輿入れの準備は進んでおったか」

彦十郎の占筮せんせいのせいで延びていたが、お福が谷家へ嫁ぐ。一門衆として恥ずかしい真似はできぬと、清宗も張り切っているらしい。出丸では弥次郎が波川から戻り次第三日三晩、ここを出て所帯を持つ彦十郎を送る宴を開く予定で三蔵たちが気張っていた。

「お福殿は実に良い女子でございますなあ」

資吉は夏に波川を訪れた時、事情を知らぬままお福にひと目惚れしてしまったそう、その後もお福の人となりを知るにつけ、すっかり惚れ込んだ様子だった。今回の波川行きもお福目当てだったらしいが、ほとんど会えなかったという。

## 友よ 第5回

「最初から、成らぬ恋だと知っておろうが」

信親も資吉のことは言えまい。気持ちがよくわかった。

「ああ、羽床がいま少し早く長宗我部家臣となっておれば……」

「案ずるな、資吉。世を生きる人間の半分は、女だ」

この中身のない陳腐な慰め言葉は、信親が昨年来、いろんな人物から入れ替わり立ち代わり聞かされた受け売りだった。

「その半分には、婆さんも赤ん坊も入っておりますな」

猪首いぐびを捻る資吉を、信親は投げやり気味に慰めた。

「お主のごとき豪傑を、世の女は放っておくまい」

みるみる資吉は満更でもない顔つきになり、早くも元気を取り戻した様子で、城下の石清川をちらりと見た。

「若、先だって石清川の辺で会あった、せせらぎという女子も可愛らしい顔立ちをしておりましたな」

「あの娘はまだ十にもなっておらぬぞ」

「待つのでござる。羽床でも、何人かの女子に目をつけており申す」

「お主も恋多き男だな」

心配してやる必要など、なかったらしい。

「人と生まれし上は、恋をせねば損ではござらんか」

そうやも知れぬが、信親は初手から大きく躓いた。

「若は側室を何十人も置けるはず。羨ましいご身分じゃ」

昨春には、資吉が座っている縁側いに、いた。

## 友よ 第5回

「恋は当分お預けだ。先だって、痛い目を見たゆえ」

「何と、長宗我部の御曹司が、失恋を？」

資吉が顔いっぱい驚き、信親を見ていた。るいについてはまだ話していない。すでに終わった恋だ。

「恋は、川に似ていると思わぬか、資吉？」

資吉はますます怪訝けげんそうな顔つきになって、信親を見つめた。

水が集まって川が出来るとき、本当は色々な流れがあり得たはずだ。だが、ひとたび一つの流れが出来上がってしまうと、もう簡単に流れは変わらない。それでも無理やり川筋を変えるべきなのか。

川のように想いを、いに向かって流し続けるうち、信親の恋はへるい川いとなって、心の中に深く刻まれてしまった。きつといつか新しい川をまた作れはするのだろう。だが、それはへるい川いとは全く別の場所に、ぜんぜん違う色の川を流すことになるはずだ。

「前からちと気になっておりましたが、若は何でもかでも、無理やり川に譬たとえられまするな」

戦と新しき友のおかげで、い、を忘れかけていたのに、波川での偶然の出会いがまたへるい川いに「想い水」を勢いよく流し始めている。

「すまんが、慣れてくれ。俺はそういう男だ」

「畏まってござる。されど若の場合、恋は攻めの一手しかござらぬぞ」  
まるで戦か何かのように、資吉は恋を語る。

「御曹司に恋文を送る身の程知らずの娘なんぞ、おりますまい。この

## 友よ 第5回

まま何もせぬでは、若は一生恋ができぬ羽目になり申す」

そうだ。信親の妻は、これから元親が決める相手に確定していた。

「やむを得まい。俺はそういう星のもとに生まれたのだ」

「いや、向こうから来ぬのなら、こちらから仕掛けましようぞ。家老屋敷なぞにも、美しい女子がおるはず。拙者もおこぼれに与り申す」

資吉が勇躍立ち上がったとき、玄関のほうで女の声が出た。

「きれいな声でござるな。見て参りまする」

しばらくすると、資吉が狐につままれたような顔つきで戻ってきた。なぜか抜き足差し足だ。

「と、とても麗しき女性が、若にお会いしたいと……。若も、隅に置けませぬな」

「何を申すか。心当たりはない」

信親が資吉と顔を見合わせるうち、衣擦れの音が近づいてきた。

広間に姿を見せたのは、白藍色の小袖を着た小柄な女だった。

大雨が降った後の奔流のように、信親の胸が激しく乱れた。

「るい……いかがしたのだ？」

驚きを隠せぬまま問うても、るいは落ち着き払った様子で着座して、信親に両手を突いた。

「突然のお訪ねお許しくださいます。急ぎ、若さまのお耳に入れたき儀がございます」

粗雑なはずのるいの立ち居振る舞いが、心なしか淑やかに見えた。

## 友よ 第5回

瑠璃の首飾りは冬の重ね着のせいか、隠れて見えない。

「聞こう」

るいは顔を上げ、信親を正視しながら言っただけだ。

「お国の大事なれば、お人払いを」

信親は面食らった。猫好きの侍女の口から出る言葉としては意外だった。口を尖らせながら立ち上がる資吉を、信親が手で軽く制した。

「羽床資吉は、俺の信ずる友だ。聞かれて困る話はない」

「されば、申し上げます」

るいは居住まいを正すと、改めて白い両手の指先を突いた。

「波川清宗どのの謀叛が露見いたしました」

絶句して、るいの唇を見つめた。紅がなくても赤くて艶がある。

「……何を申すか。あり得ぬ」

「御所さまの謀叛に加担されたご様子。すでに清宗どの阿波の海部城へ落ち延びられ、討っ手が差し向けられました」

波川にいたるいは、仕えている清宗夫人の指図で、信親による執り成しを頼みに、急ぎ岡豊へ来たという。

「案ずるな。俺から父上に申し上げれば、馬鹿げた誤解は必ず解ける。うなぎ殿が謀叛なぞ企てるはずがない」

いてもたってもいられず、信親は立ち上がった。るいがわざわざ嘘を吐く理由もない。何が起こっているのだ。

「わたしはひとまず波川へ戻ります」

## 友よ 第5回

急ぎ立ち去ろうとする、い、い、の背に、言葉を掛けた。

「よく知らせてくれた、るい。俺が決して戦にはせぬ。波川の皆には、俺を信じて軽挙妄動せぬよう、伝えてくれぬか」

道中が気懸かりだったが、何かの間違いに決まっている。弥次郎も今は波川におり、戦になるはずがなかった。

「かしこまりました」

こくりと頷いてる、い、が去ると、台所で宴の下準備をしていた三蔵を呼び、手短に事情を話した。

「手分けして、どこで何が起こっておるのか、事情のわかりそうな連中に確かめてくれ。俺は父上に会いに行く。資吉は土佐神社へ行って、彦十郎にすぐ戻るよう伝えよ」

険しい顔をした資吉と三蔵が、信親に向かって大きく頷いた。



五

「父上はいったい、何を考えておられるのだ！」

油火が揺らめく出丸の広間で、信親は齒軋りはきししながら板の間を拳骨で叩いた。

事態は恐れていたよりもはるかに早く進展し、怒濤の濁流となって、取り返しのつかぬ悲劇へ突き進もうとしていた。

信親がすぐに宗家の居館へ出向くと、元親は不在だった。忠兵衛と共に出たが、家人たちも行先を聞かされていないという。

岡豊城にいる家臣たちに片っ端から尋ねても、怪訝な顔で知らぬ

## 友よ 第5回

存ぜぬと答える者ばかりだった。るいの狂言なのかと首を傾げながら、何の収穫もなくひとまず出丸に帰ると、資吉が待っていた。彦十郎は事の真偽を確かめると言い捨ててどこぞへ去ったらしい。

まもなく戻った三蔵が、元親は天津御所的一条内政を訪ねたようだと風の噂を仕入れてきたが、その後の行き先は掴めなかった。

噂では、内政が謀叛を企図し、世話人の波川清宗を頼った。内政は元親に不満を持つ家臣たちを糾合し、一条家の遺臣たちを立ち上げさせようと目論んだものの、従ったのは結局、清宗一人だった。

かえって一条方に裏切りが出て事前に露見したため、清宗は逃げ出し、香宗我部親泰に執り成しを頼むべく、阿波の海部へ向かったという。

信親は波川か海部へ出向くべきかと迷ったが、元親と行き違いにならぬほうがよいと考え、岡豊に留まった。時どき宗家の居館へ三蔵を赴かせて元親の帰りを確かめながら、まんじりともせず夜を明かした頃、彦十郎が現れたのである。信親の軍師は由々しき事態をより正確に把握していた。

波川清宗は元親の赦しを得られず、海部ですでに自害していた。清宗の死を受け、元親の馬廻衆を務めていた実弟の次郎兵衛と五郎太夫も波川へ立ち帰った。今、波川家の一族郎党や清宗を慕う者たちが続々と波川へ集まっているらしい。岡豊城では表向き何も起こっておらず、すべては水面下か、岡豊の外で起こっていた。



## 友よ 第5回

あまりの凶事に愕然として、信親はしばらく声も出せなかった。

「波川城では、籠城支度が進められておる様子」

「籠城とは、戦でも始まりそうな言い草だな」

「戦になるか否かは、波川家の当主次第でござろう」

彦十郎の言葉に、皆が一斉に息を呑んだ。

「その当主、とは……誰のことだ？」

弥次郎のあの恥ずかしそうな笑顔が、目に浮かんだ。

「うなぎ殿亡き今、おろん嫡男の波川弥次郎でござる」

信親はごくりと生唾を呑み込んだ。

激しすぎる胸の鼓動で気が変になりそうだった。

「弥次郎が、長宗我部と戦なぞするはずがあるまい」

自分の声がひどく震えている。

「波川城には兵が集まり、兵糧が次々と運び込まれておるとか。弥次郎の叔父二人は御館様の元を去る時、討っ手を差し向けられたしと、言上して去ったと」

元親は清宗の弟二人に「咎<sup>とが</sup>めなし」との裁断を下したが、弟たちは受け容れなかった。まもなく波川討伐軍が出陣するという。

「どこから兵を出すのだ？ 戦支度をしておる兵など、この城に一人もおらんのだぞ！」

「田<sup>た</sup>辺<sup>なべ</sup>島<sup>しま</sup>城<sup>じょう</sup>には、二千ばかりの兵が集まってござった」

福留家の居城では、赤々と篝火<sup>かがりび</sup>が焚かれていたという。岡豊城へ

## 友よ 第5回

戻る道すがら見たらしい。

「土佐のど真ん中で戦を始めるつもりか！」

「寄せ手の将は、御館様の命により、福留隼人と決まってござる」

信親は荒々しく立ち上がった。

「何もかも間違まちごうておる！ これは何者かによる姦計かんけいだ。うなぎ殿に限って謀叛なぞありえぬ。皆、百も承知であろうが！」

彦十郎は苦い顔のまま、ぼそりと応じた。

「うなぎ殿には謀叛を企む器も、志もなかったはず。されど、乱世に起こる謀叛の半分ほどは、濡れ衣でござろう」

「父上なら、真まことを見抜かれるはずだ。なぜ父上は、俺にひと言も諮かつて下さらなんだ？」

長宗我部家は英明なる主君のもと、家臣団の強い団結を自慢してきたはずだった。なぜ、味方同士が戦わねばならぬのだ。

馬鹿げている。何もかも解げせぬ。

「父上は今、一体どこにおわす？」

「岡豊で波川の謀叛に同心する者があるやも知れず、どこぞに身を隠しておられるとか」

信親は舌打ちしながら、長押ながしの上の槍掛けに手を伸ばして、片鎌槍を取った。

「とにかく戦など、俺が許さん。信親衆で波川へ止めに行くぞ！」  
皆が氣勢を上げて応じて、ひとり彦十郎は座したままだ。

## 友よ 第5回

「おやめなされ、若」

「やめて、何とするのだ？」

彦十郎は居住まいを正し、まっすぐに信親を見た。

「この戦を止める手立てはござらん。波川は、諦めなされ」

信親は呆気に取られた。弥次郎だけではない、彦十郎に輿入れするお福も波川城にいる。るいも、だ。波川城には何度も滞在して、一族郎党はほとんど顔見知りだった。

「彦十郎！ お主、今、何と申した？」

唾を飛ばしながら、信親は自分の軍師に詰め寄った。

「お福殿はお主の妻になる身ではないか。近頃は弥次郎を愛弟子のごとく可愛がっておったろう」

「うなぎ殿への討っ手に、福留殿による波川討伐軍の差し向け。いずれも電光石火の早業でござる。あらかし予め手を打っておいたとしか思えませぬ。大切な御曹司を岡豊から退避させぬのも、面妖な話」

「……何が、言いたいのだ？」

「この謀叛は必ず失敗するように、最初から仕組まれていたのでござる」

「誰がさような真似をする？ まさか……」

信親は背筋が寒くなった。

元親に会えぬのは、信親を避けているからか。

「この事件の真相は、波川の謀叛にあらず。長宗我部と一条の最後の

## 友よ 第5回

政争でござろう。すべて、御館様が描かれた筋書きに相違ござらぬ。おろん、わが父も一枚噛んでおりましょう」

信親は力なくその場にへたり込んだ。

「父上、が……」

「然り。これは、長宗我部元親との戦いでござる。兵を興おこせば、信親衆は謀叛に加担したことになる申す。若には、崇拜するご尊父を敵に回して戦うお覚悟まで、おありか」

出丸はしんと静まり返った。

何とする？ 信親は必死で考えた。

「……いや、もしもお主の申すとおりなら、俺が父上の過ちを償い、長宗我部の進む道を正さねばならぬ。それが子としての孝養だ」

新目の片鎌槍を支えに、信親は再び立ち上がった。

「今、何もせねば、俺が俺でなくなる。波川家への詫びの言葉は見つからぬが、俺が濡れ衣を晴らすのだ。うなぎ殿は救えなんだが、せめて他の皆を全員守る。寄せ手の大将が隼人というのは運がいい。『不正義、赦すまじ』とがなり立てながら、俺を育てた男の中の男だ。隼人なら、こんな戦は認めん。必ず俺の言うことを聞く」

「どうですか。福留殿は御館様の腹心でござるぞ」

「聞かぬなら、カズクで止めるまでよ。とにかく俺が何とかする。皆、参るぞ！」

部屋を駆け出ようとする信親の背に、彦十郎の言葉が刺さった。

## 友よ 第5回

「長宗我部信親は未だ当主にあらず。ただの御曹司でござる」

「今、父上と戦えるのは俺だけだ。城にいる信親衆で、波川へ向かう」

「波川を守りましょうぞ！」

力強く頷く資吉の逞しい肩に手を置きながら、振り返った。

「彦十郎、力を貸してくれ。こたびの相手は手強い。俺にも、軍師が要る」



六

温もりを帯び始めた冬の日差しが、仁淀川の青く清らかな水面みなもが絶え間なく煌めかせていた。

波川城主郭の奥座敷からは、故郷を一望できる。

お福は信親のいる岡豊も好きだが、清宗がこよなく愛した波川が大好きだった。この地に生まれ、今日ここで死ぬことを誇りに思っている。

——若さまは今、どこで何をなさっているのかしら……。

信親が波川家の危機を知ったなら、取る物もとりあえず駆けつけてくれるはずだ。

昨夜、清宗が謀叛を起こして阿波へ逃れ、自害し果てたと叔父たちから聞いた時、お福は谷家への輿入れの支度で大わらわだった。弥次郎は近く岡豊へ戻る手土産にと、猿猴えんこうの竹細工を仕上げている最中だった。

清宗が謀叛など起こすはずもなかった。事情は定かでないが、清宗

## 友よ 第5回

を死へと追いやったのは長宗我部だ。だが、波川家が長宗我部に抗ったとて、初めから勝機はない。

戦こそ苦手だったが、清宗は民と一族郎党から慕われる当主だった。戦で身内を失い、波川に引き取られたかつての孤児たちも、続々と城へやってきた。急遽波川家の当主となった弥次郎は、一族郎党を取りまとめ、波川家の進む道を決めねばならなかった。それが、当主として最初の、そして恐らくは最後の役目でもあったろう。

後ろで、川面を撫でる風のように穏やかな声がした。

「やはり姉上はこちらでしたな。仁淀川は今日も、澄んでござるか？」  
弟はいつもと変わらず恥ずかしそうな笑みを浮かべていた。もう心を決めたのだと、すぐにわかった。

目に染みるほどに仁淀川が青いのは、森のおかげで空気が澄んでいるからだ、お福は思う。

「父上の死に殉ずると決し、これより当家は籠城戦に入ります。それがしの指揮の下、最後の一兵となるまで戦い、この城を枕に討ち死にする所存」

二歳下の弟はむしろ清々しい顔をしていた。

弥次郎は懸命に稽古して強くなり、何度か戦にも出たくせに、結局まだ一人も討っていないと苦笑していた。負傷の経験もない。

そんな十六歳の守将が、昨日までの味方を相手に、玉碎戦の采配を振る。それが乱世だ。

## 友よ 第5回

「弥次郎どのも、それで良いと？」

寂しげな表情で、弟はこくりと頷いた。

「皆でよくよく話し、それが父上のご遺志であろう、と。波川が、長宗我部にも、一条にも忠誠を尽くす道は、他になかったのでございましょう」

「わたしたちの大好きな人と、戦うのですね」

弥次郎は寂しげな顔で小さくかぶりを振った。

「叔父上たちのお話では、若様はまだ何もご存じないはず。知れば、苦しまれるだけでしょう。若様のためにも、これでよいと思うておりまする」

お福にはよくわからない。でも、弥次郎が出した結論なら、それでいい。お福には清宗に殉ずべき理由があるからだ。

「姉上から若様に竹細工をお渡ししてくださいませぬか。猿猴に何か持たせたかったです、間に合いませんんだ」

背の伸びた弟が、お福を見下ろしながら微笑んだ。

「まもなく討伐軍が参りましょう。母上たちとは、別れのご挨拶を済ませました。姉上もご一緒に落ち延びられませ」

罪は波川清宗ひとりであり、他の者の命を助けると、元親は叔父たちに言ったらしい。元親は実妹である清宗の室と女子を死なせはしないと、弥次郎は説いた。

お福はゆっくりとかぶりを振った。

## 友よ 第5回

「わたしはこの城で波川家と運命を共にすると、最初から決めていました」

「聞き分けのないお人でござるな。母上はもう波川を出られまするぞ。若様も谷殿も、姉上を必ず守ります。それがしが請け合いまする」

「わかっています。でも——」

懸命に説く弥次郎の澄んだ目を、お福は正面から見つめた。

「父上から固く口止めされていましたが、最後に申し上げておきたいことがあります」

お福はにっこり笑おうと思った。が、どうしてもできなかつた。

「わたしは、波川清宗さまに拾われ、育てていただいた孤児のひとりです。弥次郎どのとも、血の繋がりはありません。母上も、経緯いきさつはご存じです」

お福の父は一領具足だった。母はお福を産む時に亡くなったらしい。長宗我部に敗れた戦で、清宗の身代わりとなって父が戦死したため、不憫に思った幼子を清宗が引き取り、実の娘として育てたのだった。その後すぐに元親の姉が清宗に嫁ぎ、弥次郎が生まれた。

「わたしは波川の地に生まれ、波川家で育てられ、とても幸せでした。御礼を申します」

お福は波川家の当主に向かい、深々と頭を下げた。

「本当は、お仕えせねばならぬ身の上でした。ご無礼をどうかお赦しくださいまし」



## 友よ 第5回

肩に優しく置かれた手を感じた。

「それでも、姉上はそれがしの姉上でござる。十六年の間、お世話になり申した」

弥次郎もお福に頭を下げている。

泣きながら、遅しくなった体を夢中で抱き締めた。

「本当に立派になりましたね、弥次郎どの」

遠くから馬の嘶きが聞こえ始めた。

やがてへ七ツ片喰かたばみの旌旗せいきを押し立て進む軍勢が、仁淀川に架かる橋を整然と渡ってきた。民にとって大事な橋だからと、弥次郎が落とさせなかった橋だ。

大軍の先鋒にはへ六ツ片喰かたばみの家紋が見える。

土佐最強の将、福留隼人の軍勢だった。



七

波川討伐軍の陣は、北を蛇行だこうする仁淀川を背に敷かれていた。

南の低い山稜の上に、ちっぽけな城郭が建っている。土佐の安寧のうえに胡坐あぐらを搔き、ろくな手入れもされなかった城砦は、先日の雨で崩れた土塁を直し終えてもいなかった。

「この俺の頼みでも聞けぬと申すか！」

珍しく信親が声を荒らげても、福留隼人は太い腕を組んだまま、大きな目で波川勢の籠る城をじっと睨んでいた。

二百に満たぬ波川家の一族郎党が、小城に立て籠もっている。信親

## 友よ 第5回

たちが駆け付けた時、福留隊を中心とする二千の討伐軍は、すでに波川城の包囲を済ませていた。

「聞けぬと申し上げてござる」

「なぜだ、隼人？」

「この福留隼人、主命に背くわけには参らぬ」

隼人は一貫して首を横に振り続け、取り付く島もなかった。

本陣で漆黒と白銀の具足が激しく怒鳴り合う姿は、恐らく波川城からも見えているだろう。

「濡れ衣を被せて一族を討つなぞ、誤りに決まっておる。お主ら父子は昔、たとえ死すとも不正義に抗えと、俺に教えたぞ！」

「これは戦でござる。目の前に降伏を拒む敵がおれば、討つしかござらん」

隼人は降伏勧告の使者を送ったが、弥次郎は峻拒しゅんきよしてきた。信親が城門の前から弥次郎たちに必死で呼びかけても、返事はなかった。

「何度言わせる？ 波川は敵ではない！」

「今は敵になったのでござる！」

隼人は不動明王のように口を真一文字に結んだ。

長い付き合いでよく知っていた。こうなると、この男は挺子ていこでも動かせない。

「頼む、隼人。この通りだ」

信親は地べたに座り込み、隼人に向かって両手を突いた。

## 友よ 第5回

「とにかく兵を一旦引いてくれ。俺が父上と話を付けてくる」

隼人はゆっくりとかぶりを振った。

「若殿。弥次郎の身になって考えてみなされ。もしも若殿が父君を弑されたとして、下手人を赦せまするか？ 民も一族郎党も、うなぎ殿を深く慕っており申した」

信親は齒を食い縛った。だが、降らぬからといって討つなど、もつと間違っている。

「波川の皆には、俺が詫びる。父上にも詫びさせる」

「世には、決して赦せぬことがござる。されど事の真偽、経緯にかかわらず、今わしらの目の前におるのは、わが長宗我部に反旗を翻した者たち、すなわち敵でござる」

隼人の重い声音に、仁淀川のウグイやオイカワも押し黙ったかのように静かだった。

「とにかく総攻めは待て。俺がいま一度、城に呼びかける。粘り強く続けければ、きっと和議の糸口を掴めるはずだ」

「何度やっても無駄でござる。波川弥次郎は今、藤目城の新目弾正と同じじゃ」

信親の全身が戦慄した。

敵が全滅するまで続く、身の毛もよだつ戦をこの土佐でやるというのか。それも――

「相手は友ではないか！ 何ゆえ友を討たねばならぬ？！ 俺は嫌じ

## 友よ 第5回

や。ついこの正月も旨い酒を飲んで、共にたらふく餅を食った仲ではないか。お主も、弥次郎と一緒に餅を搗ういておったろうが！」

悲鳴を上げるように信親が訴えると、隼人らしからぬぼそりとした声が返ってきた。

「ああ、弥次郎は合いの手が巧いですから。たくさん搗うきましたぞ。若殿はよう弥次郎と一緒におわした。じゃからわしも、あの小僧の面倒をよう見てきた。初陣で失敗した後、何度もしつこく田辺島の城へやってきては、稽古を付けてくれと頼たのんできましてな」

背も小さく、脊力りよりよもない弥次郎は最初、隼人に片腕で弾き飛ばされたが、何度も立ち向かった。叩きのめされて怪我をしても、治るとまた、教えを乞いに現れた。

「今年の年賀の後に手合わせをしたときは、なかなか手応えがござった。あの弱虫の小僧がどれだけ努力を重ねてきたかと思うと、わしは涙が出ましたぞ。わしも正月くらい休むつもりが、奴め、長宗我部のためにもっと強うなりたいたいと言うてきおる。正月に餅を食いすぎて肥えてしもうたゆえ、とことんしごいてやりましたわい。弥次郎だけではござらん。あの城に籠もっておる者たちを、わしは一人ひとり、ようよう知っており申す」

いつもは太い隼人の銅鑼どらこ声こゑが、今はすっかりしぼみ、擦かれてすいた。

「波川衆はうなぎ殿を筆頭に皆、弱かった。じゃから、最強の黒備えに稽古を付けてほしいと、田辺島の城へよう来ておりましてな。不覚

## 友よ 第5回

を取った伊予攻めでも、亡き父と共に戦うた仲。近ごろはだんだん強うなってきた、楽しみにしておった……」

隼人は途中で声を詰まらせた。

「かような戦を、誰がやりたいものか。若殿なら、おわかりじやろう。あの者たちは、わしらの手で討たねばならんのじゃ」

隼人はついに、ゆらりと立ち上がった。

「ここ波川に集いし将兵は、土佐最強のわしを慕う兵のみ。己の友が、見ず知らずの者たちの手に掛かるくらいなら、己が手で波川衆に止どめを刺さんと、名乗り出て参ったもの。功名目当ての輩など、一人もおらぬ。われらが今ここにあり、敵となりし親しき友と戦う理由はただひとつ」

隼人は深い息を吐いてから、言い切った。

「波川の兵たちに、死に花を咲かせてやるためじゃ。たとえ大輪にあらずとも、思いのまま見事に咲き誇る、一輪一輪の死に花を……」

信親は愕然として、隼人の顔を見つめた。

城を見やる猛将の目には、今にもこぼれ落ちそうな涙が浮かんでいる。

「今日がああ連中に稽古を付けてやる、最後の日でござる」

信親は絶望して、項垂れた。

隼人は完全に覚悟を決めている。もはや、この戦は止められまい。

「されば、総大将。信親衆に一手をお任せあれ」

## 友よ 第5回

信親の後ろで、彦十郎の低音がした。

そうだ。まだ手はある。真っ先に主郭へ討ち入って、弥次郎たちを説き、命を救うのだ。

だが元親なら、信親の身を案じ、城への突入など決して許すまい。

信親は祈る気持ちで隼人を見た。

二人はしばし睨み合ったが、やがて隼人が頷いた。

「攻め手に加わられよ。万一若殿が怪我などなされれば、わしが腹を切ればよいだけじゃ」

信親は鎧音を立てながら、立ち上がった。

「恩に着るぞ、隼人。お主も、弥次郎たちも、俺が死なせぬ。一人でも多くの土佐人を救って見せる」

冬日が明るく照らす波川に、川風は沈黙したまま、そよとも吹いていなかった。



八

仁淀川河畔に建つ小さな城に、二千の長宗我部軍が一気に攻め上がっていた。

やはりうなぎ殿は、謀叛など微塵みじんも考えていなかった。波川勢がほとんど弓鉄砲を放たなかったのは、ろくに矢弾の支度もできぬままに籠城戦へ突入したからだ。

信親は彦十郎、資吉らと、難なく土塁を突破した。

寄せ手の先頭を切って疾駆する。

## 友よ 第5回

やがて、見慣れた主郭の下まで到達した。見上げると、紅糸威べにいとびせしの具足と深紅の陣羽織に身を包む弥次郎がいた。

胸を締め付けられた。ここからなら、声が直接届く。

「赦してくれ、弥次郎！ 父に代わって詫びる。頼む、降ってくれ。生きてさえいれば、俺が必ず、お前と波川の皆を守ってみせる」

必死に叫ぶ信親を、弥次郎が憮然とした顔で見下ろしていた。

「憎き長宗我部の御曹司が、何やらほざいておるぞ！ 誰ぞ討ち取って、元親めに後悔させてやらんか！」

弥次郎の言葉に愕然とした。それでも、信親は必死で続けた。

「お前たちが怒るのも当たり前前だ。悪いのはすべて長宗我部ぞ。こんな所で命を——」

信親の声が終わる前に、周囲で一斉ととに関との声が上がった。

最初から、城内に討伐軍を引き入れて、決着を付ける肚はらだったのか。

信親衆と福留隊の黒具足が走り出て、信親を取り囲んで守る。剣戟けんげきの音と喧騒が、たちまち狭い城内を満たした。

——弥次郎と二人きりで、じかに話さねばならぬ。

信親は敵味方をすり抜け、城内を駆けた。

勝手を知りすぎているのが悲しくてならなかった。

行く手を遮ろうとする波川の兵を、石突いしづつきで突き飛ばした。片鎌槍の覆いは付けたままだ。

信親は戦うために戦場にいるのではない。止めるためだ。

## 友よ 第5回

階段を駆け上がった奥に、深紅の陣羽織の後ろ姿があった。

昨夏、皆で宴会をやった奥座敷だ。

友は薙刀なきなたを片手に、青空の下を流れる仁淀川を眺めていた。

「この戦は間違っている。お前が波川の者たちを止めてくれ。俺が隼人を止めてみせる」

必死に言うと、弥次郎は振り返って、寂しげに笑った。

「それがしはもう、弱虫の波川弥次郎ではござらん。隼人殿や若様たちに、ずいぶん鍛えていただきましたゆえ」

弥次郎が両肘を開いて、薙刀を上段に構えた時、彦十郎と資吉が背後から上がって来た。

「俺が弥次郎を説く。お主らは他の者たちに、命を落とさせるな。一人でも多く救うのだ」

「心得てござる」

二人が畏まって去ると、信親は弥次郎のほうへ歩み寄った。

「こたびの、ようわからぬ諍いさかいは、俺とお前には関わりがない」

「われらはもう童にあらず。それがしは波川家の当主になり申した。わが波川は小なりといえど、これは、家同士の争いでござる」

いつも弟分のように接してきた弥次郎が、今は急に大人びて見えた。

「やめようぞ、弥次郎。こんな馬鹿げた戦に何の意味がある？」

笑い飛ばさそうとしたが、顔が引き攣くって、思うようにならなかった。



## 友よ 第5回

「御曹司を殺せば、憎き元親にせめて一矢を報いられる。覚悟されよ」  
弥次郎は父を殺されて逆上している。当然だ。

世に不仲の親子は幾らでもいるが、清宗と弥次郎はすこぶる仲の良い父子だった。元親と信親も、同じだ。だからこそ、気持ちがよくわかる。

「ここは堪<sup>こら</sup>えてくれぬか。波川家には真にすまぬ真似をしたと、父上に詫びを入れさせる。波川の名誉も回復する」

「御館様は英明なお方なれば、よくよく思案の上、こたびの一件を進められたはず」

弥次郎の言う通りだ。るいが知らせなければ、信親は今回の政変がすべて終わった後で、初めて気付いたのではないか。

「なあ、弥次郎。俺との約束はどうなる？ 四万十行って赤目を釣り、猿猴と——」

薙刀が打ち下ろされてきた。速い。

やむなく片鎌で刃を受け止める。

刃が引かれると、片鎌槍に被せてあった覆いが切られて、落ちた。すかさず打ち込んでくる。難なく振り払って、体を弾き飛ばした。

「やめよ、弥次郎。無駄だ」

「何のこれしき！」

弥次郎が渾身の力で薙刀を突き出してくる。

片鎌で応じ、鎌を薙刀の柄までずらすと、カ一杯押し込んだ。

## 友よ 第5回

薙刀ごと体を吹き飛ばす。

弥次郎はしたたかに腰を打ったが、それでも立ち上がった。

雄叫びを上げて、立ち向かってくる。

今度は槍を大きく回して、足を払った。薙刀は部屋の隅へ飛んで行く。板間に背を打ち付けた弥次郎が呻き声を上げた。四つ這いになって、薙刀を取りに向かっている。

「もうやめようぞ、弥次郎」

強き長宗我部侍たらんと、弥次郎は涙ぐましい努力を重ねてきた。隼人が認めるように、今やその腕前は並みでない。だがそれでも、信親には敵わなかった。

弥次郎とて百も承知だろう。腰をさすりながら、ふらりと立ち上がり、薙刀を中段に構えた。

「まだまだ、勝負はこれからでござる」

信親はやむなく片鎌槍の先を向けて応じた。

「無体な頼みとは承知の上だ。だが今は降れ、弥次郎。降ってくれ」

「波川家は長宗我部に膝を屈せぬと決まり申した。当主が逃げるわけには参らぬ」

「皆の無念はわかっておる。頼む。この通りだ」

信親が懇願しながら首を折るように頭を下げた時――

突然、槍の穂先に衝撃が走った。

慌てて顔を上げる。

## 友よ 第5回

薙刀を捨てて弥次郎が飛び込んでいた。

信親の片鎌を握り込み、自らの胸を穂先で貫いている。

信親の全身が凍り付いた。穂先を引き抜き、槍を投げ捨てた。

狂ったように、友の名を叫ぶ。

弥次郎の体が仰向けに倒れてゆく。必死で駆け寄る。

信親が夢中で抱き起こしたとき、友の胸から噴き出る生温かい血を、顔からまともに浴びた。



九

腕の中で、血塗れの友が鈍い呻き声うめを上げた。

「なぜだ、弥次郎！」

戦に出て初めての、そして最後となる弥次郎の負傷は、信親の槍が与えた致命傷だった。

「なぜ、お前のように優しい人間が、かような目に……」

覚えず発した意味なき問いにも、弥次郎は真面目に答えた。

「弱かったから、でございましょうか」

友が力なく微笑んだ。口元から流れる血が首筋へと伝ってゆく。

「違う。お前が弱いものか」

一門衆の嫡男として苦手な武芸に打ち込み、嫌いな戦に出、当主たる誇りを守って最後の玉砕戦を見事に演じ切った。

「すまぬ、弥次郎。赦してくれ」

「主が家臣に詫びる必要はありません」

## 友よ 第5回

「たとえそうだとしても、友には詫びるべきだ」

弥次郎はいつも信親のそばにいてくれた。それだけで、どれほど心が温もったことか。

「若様の継がれた長宗我部のために尽くしとうございました。先だっては、初めて隼人様にも褒められた、のに……」

信親は堪らなくなって、弥次郎の体を掻き抱いた。

「わが父は名将でも、名臣でもなければ、優しいお人でした。されど、父とそれがしは、武士には向いておりませなんだ……」

友が友に討たれるこんな世は、絶対に間違っている。

「若様のおかげで、長宗我部を憎まずに死ねることが、せめてもの救いでございます」

弥次郎が夥おびただしい血を吐くと、信親の白銀の具足が赤く染まった。

「俺には何もできなんだ、お前を守ってやれなんだ……」

「若様と戦っていた時、石清川で昔、助けていただいた時のことを思い出しておりました」

三蔵たちと仲良くなった時のことか。友はそんなことを考えながら、薙刀を振るっていたのか。

「あの時は鰻を捕まえて、皆で一緒に食いたかったな」

「若様とご一緒にいられて、楽しゅうございました。願わくはいま一度、若様の鼓つづみとそれがしの笛をもう一度、合わせられたなら……」

どれだけやり残したことがあるだろう。

## 友よ 第5回

弥次郎はもう痛みを感じないのか、穏やかな笑みさえ浮かべていたが、やがて苦しげに呻いた。

「俺に何か、できることはないか」

「若様と、仁淀川を見とうございまする」

「おお、見ようぞ」

信親は弥次郎の体を抱き上げ、波川城の露台ろだいに立った。

仁淀川は今日も、青い。

二人の眼下には、はるか空の色を映しながら、仁淀川がいつもと変わらず流れてゆく。

「必ずや四国を統一し、若様の方で、弱き者たちに笑顔をもたらししてくださいませ。それがしにしてくださいませ、ように……」

「ああ、約束する。俺が四国の乱世を終わらせてやる。その後は、全  
国の乱世だ。戦なんぞやめて、日本中で川遊びをするのだ」

弥次郎が力なく笑った。いつどんな時も、友は信親のそばで微笑んでくれた。これが、最後か。

「ご案内できずに済みませぬが、四万十川へ行かれませ。蒼き空を鏡のように映す清流は、きっとお気に召しましょう。四万十では浅瀬を  
広がる流れが、小さな波を幾つも作って、まるで大きな魚の鱗のよう  
に見えるのです」

「ああ、必ず参る。お前が言うように、本当に四国一の川なのか、確かめねばならん。赤目も釣るぞ。猿猴にも会う」

## 友よ 第5回

「おお、失念しておりました。若に差し上げたいものが広間の隅にございます」

「俺のために何か作ってくれたそうだな。礼を言うぞ」

弥次郎が震える手で指さす先に、小さな竹細工が立っている。

信親は広間へ戻り、弥次郎を横たえると、取りに走った。

入口に近い部屋の隅に、猿猴らしき物がいた。伝承の通り、頭に皿くらばしを持ち、嘴くちばしを尖らせた愛嬌のある顔に、細長い手足がくっついてい

る。  
「おお、これぞまさしく猿猴だ。顔つきがどこことなく彦十郎に似ておらぬか」

猿猴の腹の部分を掴んで、そっと持ち上げる。

「四万十で猿猴に会ったら、こいつを見せてやろう。きっとそっくりだ。驚くだろうな」

信親は小さな猿猴を手に、窓辺の弥次郎のもとへ足早に戻る。

「なあ、弥次郎。猿猴は酒を飲むと思うか？ 好物を飲み食いさせれば、友になれると思うのだ。お前は手土産に何がよいと思う？」

弥次郎からの返事はなかった。夢中で駆け寄る。

友はすでに息絶えていた。

安らかな死に顔の口元には、いつもの恥ずかしそうな微笑みを浮かべている。

信親は弥次郎の骸むくろを掻き抱いた。

## 友よ 第5回

固く、固く抱き締めながら、声にならぬ声で泣き叫んだ。

「若……間に合いませんだ」

嗚咽を漏らす信親の背後で、資吉の声がした。

振り向くと、資吉の隣で彦十郎が立ち尽くしている。

その腕の中には、一人の女性がいた。血塗れの嫁入り衣装に身を包んだお福だった。首筋の傷跡を見て、自裁じさいと知れた。

「なぜ、逃げなんだ……」

籠城戦にあたり、お福があえて輿入れの衣装を纏まとったのは、長宗我部、あるいは運命に対する抗いであつたらうか。最期に、女として着飾りたかったのか。

「仲の良い姉弟でしたからな。せめて、隣で……」

彦十郎はお福の骸を弥次郎のそばへ、そっと横たえた。

仲睦まじい姉弟は三途の川で落ち合い、一緒に渡れるだろう。

なぜ人の世はかくも辛く、悲しいのか。

泣き喚く信親を慰めるように、資吉が太い腕で抱き締めてきた。すぐそばには、彦十郎が寄り添っている。それでも信親は泣くのをやめなかった。

波川城の鬼門きもんにあたる北東には、波川家菩提寺の本願寺があった。戦の後も長宗我部の将兵が沈黙を貫いていたのは、城を落とすにしても、それが勝利でも何でもなかったからだ。

## 友よ 第5回

一夜にして滅んだ波川一族の霊を、将兵の皆で丁重チョウジュウに吊った後、信親は仁淀川の辺に立った。るいの姿はなかった。籠城前に弥次郎の母と岡豊へ逃れたようだった。

「なぜ仁淀川は、こんな日も綺麗に澄んでおるのでしょうか」  
資吉のつぶやきに、間を置いて、彦十郎がぼそりと応じた。

「先だつての宴でお主が居眠りしている間に、うなぎ殿は、見る者の心によって、川の色が変わると言うておられた」

「変だな。俺の心は今、血みどろで真っ赤に染まっておるのに」

信親が隣を見ると、彦十郎は涙を隠すように、日の傾きで色づき始めた天蓋てんがいを見上げていた。



十

元親の前で、熊のごとき巨漢が物も言わずに平伏していた。傍らの忠兵衛も黙して見守るだけだ。

「波川弥次郎も、最後まで謀叛人を演じてくれたか」

甥の若者が、死んだ。父の清宗に似ていつも笑顔で、たいていわが子信親と一緒にいた。

冬ざれの禅寺の庭に夕光はまだ残っている。二百五十年以上も昔、名僧・夢窓疎石むそうそせきが結んだ庵いおりは、長宗我部家の庇護する禅寺となっていた。

波川の乱の間、元親は忠兵衛と共に、ここ五台山ごたいさん西麓さいりやくの吸江庵きけいあんにあった。事態をいち早く知ったらしい信親と会わぬようにするためだ。



## 友よ 第5回

「長宗我部のため、波川衆は皆、見事に命を捧げ……」

隼人が声を詰まらせた。この熱き猛将が、意外な成長を見せる弥次郎を買い、ゆくゆくは次代の土佐軍の一翼を担わせたいと進言してきたのは、羽床城を攻略して次の戦地へ向かう途中だった。

「惜しい若者を失くしたな」

元親の前で、巨漢はなかなか顔を上げようとしなかった。

「不服か、隼人」

長宗我部の代わりに、波川が悪名を被る。

波川清宗は、伊予攻めの失態で叱責されたことを根に持ち、元親を逆恨みしていた。自らが世話する一条内政にそそのか唆され、共に謀叛を企んで失敗し、滅んだ。内政は愚昧ぐまいな恩知らずで、長宗我部に非は微塵もない。へ波川の乱へは世にそう伝わっているはずだった。だが、真相は違う。この筋書きを描いたのは、元親と忠兵衛だった。

「長宗我部の汚名を避くるため、これほどまでに血と涙を流さねばならぬ、と……?」

震える隼人の声には、明らかかな非難が込められていた。

濃鼠こいねずの鉄扇てつせんで、パシリと軽く左の掌を打ってから、元親は短く応じた。

「然り。一条家の軛くみから完全に放たれねば、長宗我部は飛翔できぬ」  
約七十年前、長宗我部は一度滅ぼされた。

殺された当主兼序かねつぐの遺児国親くにちかは、主筋の一条家を頼り、救われた。

## 友よ 第5回

長じて国親は一条家の力を借りて家を再興し、旧領の岡豊を奪還した。長宗我部は一条に対し、多大なる恩義しかなかった。ゆえに一条を滅ぼすには、相応の時を掛けねばならなかった。幸い先代の一条兼定かねさだは不明の君主だった。元親は兼定をさんざん踊らせた挙句に滅ぼし、幼かった嫡男の吉房子、今の内政を傀儡として祀り上げた。

その内政の世話は、うなぎ殿こと波川清宗に任せた。

気のいいあの男なら、悪いようにはすまいと考えた。元親とて一条への恩義を忘れたわけではない。内政が不遇の境涯を受け容れ、おとなしく人生を終えてくれるなら、問題はなかった。内政には元親の娘を嫁がせ、監視の目を光らせはしたが、大津御所では何ひとつ不自由ない暮らしをさせていた。

だが内政は、飼い殺しの境涯に満足しなかった。入江左門からの報告で、内政が謀叛を企て、波川に挙兵を迫る動きが明らかとなった。

板挟みになって苦しむ清宗の様子を入江から聞くや、元親は迷わず決断した。

——この機に、一条を葬り去らん。

土佐国司にして主筋にあたる一条家は、安寧の土佐に残るただ一つの火種だった。いつか長宗我部が力を失ったとき、土佐統治の正統を覆しかねぬ。

元親は忠兵衛と謀り、波川に濡れ衣を着せると決めた。

内政の教唆により謀叛を企んだ咎で、清宗に腹を切らせ、一条家を

## 友よ 第5回

完全に滅ぼすのだ。

元親はまず、過去の伊予での失態を理由に、四万十の波川領を召し上げる旨、中村にいる清宗に書状で知らせた。仰天して嘆願に来た清宗に対し、内政の企てを知らながら主家に明かさなかったのは謀叛に等しいと難詰した。震えあがった清宗は阿波の香宗我部親泰に救いを求めたが、元親は切腹を命じ、清宗は自刃して果てた。

「……若殿と若い衆の胸の裡うちを思わば、無念でなりませぬ」  
顔を伏せたままの隼人が、言葉を絞り出している。

清宗は武将としては二流だが、領地をよく治めていた。だが、人材に事欠かぬ長宗我部家臣団では、いなくても別に困らなかった。

元親は清宗ひとりの死で事を済ませる肚つもりだった。が、波川の一族郎党の絆は固く、清宗の弟二人は元親側近でありながら、兄の死を受け容れなかった。すべてを滅ぼすしかないと諦めた。

「信親にも、いずれわかる」

「畏れながら御曹司は、御館様とは違う大樹となられましょう」

隼人は身を起こしたが、最後まで元親に目を合わせぬまま、「御免」と言い捨てて辞した。忠兵衛がその後を追いかける。

咎なき波川家を討ち滅ぼせる将は、福留隼人をおいてなしと考えて命じたが、壮絶な同士討ちに嫌気がさしたらしい。

後には、隼人の残していった熱気だけが漂っていた。

元親は自らを罰するように、鉄扇を左掌に打ち下ろした。筋書き通

## 友よ 第5回

りに事が運んでも、謀略はいつも後味が悪い。

だが、あの日以来、元親は常に手を汚し続けてきたのだ。今さら、気に病む必要はない。

元親は十八歳の時、父国親の命を受け、久武親信と共に一つの謀略を成功させた。

へ土佐七雄〉の一角、香宗我部家の乗っ取りである。

長宗我部は三男親泰を婿養子に送り込み、香宗我部を併呑しようとした。これに抗した当主の秀通ひでみちは、乱世を生きた海千山千の将だったが、なぜか若い元親だけは心底信じていたらしい。

長宗我部はその油断に乗じた。元親の裏切りを知った時の秀通の顔が、今でも忘れられぬ。香宗川西岸こうそうがわに建つ香宗城の主郭にあって、秀通は怒りでも諦めでもなく、ただ驚きの表情で元親を見つめていた。それは眼前の元親よりも、人間という生き物に対する絶望と懷疑であったろうか。秀通と数名の忠臣は凄絶な最期を遂げ、香宗我部家は完全に長宗我部の手に落ちた。父と親信からは大いに賞賛されたが、元親は独り楽しまなかった。

その後も元親は、姉の嫁いだ義兄を滅ぼして領土を広げ、ついには、大恩ある一条家の当主をも陥れて追放し、土佐を統一した――。単人に後始末の指図を念押ししていた忠兵衛が戻った。

「こたびの一件、信親はいつ、どこで知ったのだ？」

今回の政変での誤算は、信親の動きだった。昨夜、信親が血相を変

## 友よ 第5回

えて居館へ現れ、面会を求めていると知るや、元親はやむなく逃げるように岡豊を出た。

本来なら、すべてが終わった後に元親から事の次第を伝え、信親は真相を知らぬまま、波川の乱に涙するだけのはずだった。だが、信親は意外に早く気づき、波川討伐軍にまで加わって、真相に近づいてしまった。

「……もしや、あの者か？」

元親が重ねて問うと、忠兵衛は首を傾げ、苦い顔で返してきた。

「すべて極秘裏に進めて参った企てなれば、どこから若殿に漏れたのかは早晚、知れましょう」

いずれにせよ友を謀殺された信親が、黙ってはいまい。今晚にも来るはずだった。



十一

元親は大手門脇の居館へ戻るなり、すぐに酒を呷り始めた。穴喰屋に言いつけて、各地の良酒を取り寄せてある。

酒に強いせいもあってなかなか酔えぬが、ようやく酒が回り始めたころ、忠兵衛が伺候しこうしてきた。

「若殿がお越しになりましたが、明日になさっては何？」

——来た、か……。

父を責めて気が済むのなら、それもいい。乱世の理わきまを弁えるのに、十七歳はまだ若すぎる。

## 友よ 第5回

「会おう。忠兵衛、そなたもここにおっつけてくれぬか」

部屋に入ってきた信親を見るなり、元親は内心アッと声を上げた。わが子は返り血を浴びたままの具足姿だった。血は乾いて褐色に変じていても、まだ生臭い匂いを放っている気がした。元親に抗議するため、あえてずっと脱ぎも拭いもせず<sup>に</sup>いたわけか。

「波川討伐、大儀であったな」

信親はまだ血がこびり付いたままの両手を突くと、真っ赤に泣き腫らし充血した目で睨みつけてきた。

「わが友を、わが手で、討ちました……」

信親は、弥次郎がそばに<sup>に</sup>いるだけで心が救われたと、長宗我部のために薙刀の腕前を懸命に磨いていたと、四万十川で幻の魚を共に釣る約束をしていたと、猿猴の竹細工を作ってくれたと、ありとあらゆる思い出を<sup>とっと</sup>と語った。波川弥次郎は優しく思いやりがあって、討たれるべき人間ではなかったと訴えた。

元親は聞き流すだけで、何も言わなかった。乱世の理をありきたりの言葉で諭しても、反発を生むだけだ。今はまだ、わかる必要はない。「父上が平定された土佐は、皆が笑うて暮らせる楽土だと思っておりました」

甘い。四国統一が成らぬ限り、土佐に真の楽土は訪れぬ。地獄に囲まれた楽土など、たちまち滅ぼされよう。楽土は、血を流し続けた果てにしか、築けはせぬ。元親は楽土とした四国を、信親に引き継がせ

## 友よ 第5回

てやるのだ。

「あの叔父御が謀叛を企むはずもありませぬ。父上は何と酷い真似をなさるのか」

清宗は長宗我部のために一身を犠牲にしてくれた忠臣だ。だが波川一族が齒向かう以上、ほかに道はなかった。怨恨を抱く者を少しでも生きて残せば、いつの日か災いをもたらず。世の道理だ。聡明な信親なら、頭では承知している。時と経験が足りぬだけだ。今はただ、ねん 労うだけでいい。

信親が非難の目で睨みつけても、元親は子をいとく 慈しむ父親の目で受け止めた。清き川の流れに棹さお さす大岩のように、どっしりと構える。汚名は元親の代で被っておく。すべては、信親の手を汚させぬためだ。

「……父上を初めて、憎いと思いました」

かつて若き日に香宗我部家を滅ぼした時、元親も同じように父を憎んだ。まさに今、信親も乱世の修羅場をくぐっているのだ。苦難は人を磨いてくれる。強くしてくれる。この悲劇で、信親はまた大きく育つはずだ。

信親は視線を元親から逸らしていない。

孝行者の信親には、これが精一杯の非難だろう。もしも酔っていないければ、少しく心が傷付いたろうが、酒とはありがたい葉だ。

「さようか」

「私が長宗我部を継ぐなら、父上とは違う道を歩む所存。御免」



## 友よ 第5回

信親はやかま喧しい具足の音と共に立ち上がり、踵を返した。ふだんの立ち居振る舞いは、公家を思わせるほど優雅だが、今宵は荒々しい。元親は苦笑いしながら酒を呷った。三十年近く前、元親も似たような言葉を父に向かって吐いたのを思い出した。

信親の去った後には、板間にできた涙の小さな水溜まりと、しつこく消えようとせぬ戦の匂いだけが残っていた。

### 十二

「若殿は誰よりも孝心篤く、聡明なるお方。いずれ必ずおわかりになりますよう」

無力な慰めの言葉を口にしながら、忠兵衛は自分にも言い聞かせているのだと気づいた。

元親が酒を呷っている。信親が去ってから三杯目だ。

昔からこんな時、元親は酒を飲んだ。決して乱れず、黙々と飲み続ける。酒は物事を解決しないが、己を苛む心の刃を少しばかり鈍らせてくれる。今宵は、伊予で近ごろ評判だと実喰屋が仕入れてきたほどほどへほどほど不如帰ほどほどなる澄み酒で、忠兵衛も付き合っていたが、なかなか酔いはやって来てくれなかった。

元親はただ一点、信親が作った水溜まりを見つめていた。もう、ほとんど乾いている。

今回が初めての父子のあつれき軋轢あつれきだった。これまで口論はおろか、信親は口答えひとつ、したことがなかったはずだ。



## 友よ 第5回

長い沈黙を破って、元親がようやく口を開いた。

「こたびの一件、彦十郎は何か、言うておったか」

予想しえた成り行きだが、お福も死を選んだ。忠兵衛は息子から友だけでなく花嫁を奪ったことになる。

「ずっと、黙しておりましたな」

おろん納得した様子はなく、ただ黙っていた。もともと信親の手で俗世に引き戻されるまで、厭世えんせいに身を委ねていたから、諦めることに慣れているのか。

元親が気を取り直したように、手の鉄扇で左の掌を打った。

「乱に連座せし者として、一条内政を追放する。その後、折を見て入江に始末させよ」

内政は婿であり、元親の長女との間に孫もいるが、火種は消さねばならぬ。内政は重臣の波川を唆し、恩義ある長宗我部に弓を引いた恩知らずだと、世に知らしめた上で、だ。

「畏まって、ごさいまする」

わずかに齒切れの悪くなった返事に、元親が忠兵衛を見た。すでに、ふだんの落ち着き払った主君に戻っている。

「忍び猫なら、造作ぞうさくもあるまい。何か、不具合でもあるのか」

入江は身のこなしが猫のように敏捷ですばしこく、猫の鳴き真似も本物そっくりで、猫の臭いも使って敵の忍びあひむを欺く。実にうまく猫を用いるため、敵味方に「忍び猫」ともあだ名されていた。

## 友よ 第5回

「このところ、どうも入江に煮え切らぬ節かじがございます。実は——」  
先だって、入江が初めて任務に失敗した。本来なら消しておくべき相手の息の根を止めなかったために、逆に手練れの配下を何人も失ったのである。

「珍しいな。なぜだ？」

「若殿の関わりかど。あの者も、一応は人間だったということございましょう」

元親が盃の酒を勢いよく飲み干した。忠兵衛と同じで、今宵はまだ酔いが足りぬらしい。

「切れすぎる包丁は、持っているだけで危ない。あの者は、裏を知りすぎておる」

元親の額に殺気が走るのを感じて、忠兵衛は両手を突いた。

「あれほどの忍びは四国におりませぬ。後でわかれば、若殿は決して納得されますまい」

「やり方次第じゃ。難事を申し付けい。敵に殺されたなら、怒りは別に向かう。もしも一条内政を討てぬと申すなら、入江を始末せよ」

元親が荒々しく手酌で酒を盃に注ぐと、酒がずいぶんこぼれた。

気にせず飲み干してから鉄扇を握り込み、ふだんの調子で軽く振り上げる。

「本当に、よろしいのですな」

忠兵衛が念を押すと、元親の鉄扇が宙に止まったまま、動かなくな

## 友よ 第5回

った。過去が蘇り、心にかすかな痛みでも覚えた様子だった。

「構わぬ。あれは、余の気の迷いであった」

鉄扇はまた、元親の左掌に正しく下ろされた。が、いつもの音ではなく、ひどく湿った鈍い音だった。

(第一部了・続く)